

TAKE FREE

Magazine
for
Iwaki
Masters

いわきの地域包括ケア、
いごいてます！

igoku

いごくとは、
いわき市でスタートした
「地域包括ケア」の取り組みの
“理念”を表す言葉。
「動く」という言葉のいわき弁。
人が健康で、幸せに、
より長生きできるように、
さまざまな企画、情報発信を
展開しています。



いわき市地域包括ケア推進委員会

紙のいごく

vol. 12



3月も半分が過ぎた。暖かくなってきたとはいえ、まだまだ冷え込みが厳しい福島県南相馬市小高区の朝。仕事へと向かうサラリーマンと共に、7時2分小高駅発いわき駅行きの電車に滑り込んだ大学4年の私は、この後自分に起こる出来事をまったく予期していなかった。

福島に関わって2年になる。小高で活動するうちにライターとして仕事がしたいと思うようになり、インターン先のデザイナーに次の「弟子入り」先を聞いてみると、「いごく」の編集部を紹介された。実は、いごくのことは大学2年の時から知っていた。地域福祉の授業で先行事例として紹介されていたのだ。障がい・福祉について、当事者やその関係者以外気軽に語ってはいけないという思い込みをもっていた私にとって、いごくはこれまでの自分の常識を覆すものだった。

意を決して、いごく編集部の小松さんに連絡してみると、「ちょうどいわきで取材があるから同行してみない？」と誘われた。それで、私はいわき市東田町にあるうどん屋にやってきたのだが…、うどん…？ 頭にハテナがよぎりつつ注文をし、編集部の皆さんと「かき揚げうどん」が来るのを待っていた、まさにその時に事件は起きた。

小松さん「そうだ、前野さん、今回のいごく、文章書いてみたらいいじゃん！」
みなさん「いいね！やってみてよ！」
私「ぜひ、やらせていただきたいです！」(16字で即答)

ほぼ反射的に返した16文字の返事に、自分の中でこれは貴重な機会になるぞという確信があった。一步踏み出すのにはこのくらいの勢いが大切だ。……とはいえ、まずはうどんを食べて、いったん落ち着こう。



特集 いごく編集部で働くみなさん

みんなで作る日常の「居場所」

この日、編集部のみなさんと訪れたうどん屋さんは、東田町にある「天真庵」。こだわりの手打ちうどんのほかに、日替わりランチなどがほぼワンコインで食べられる、地元でも有名な人気店……という前情報をもらっていた私は、美味しいうどんが食べられるぞ！ やった！ ひそかに心の中でガッツポーズを決めていた。

全員の注文が決まり、厨房のほうに声をかけると、2人の店員さんが注文を取りに来てくれた。女性のスタッフが一言一言注文を繰り返して、隣にいる別の女性が注文に間違いがないかチェックする。とても丁寧なダブルチェックだ。厨房の中でも連携が取れている様子が見受けられた。

15分ほど経ったころ、美味しそうな湯気をあげた「かき揚げうどん」がやってきた。ポリウムに圧倒されつつも、食べ進める。さすが手打ちうどん。コシの強さはもちろん、麺の太さもちょうどよく、食べこたえと食べやすさのバランスが絶妙だった。うどんの硬さと細さの黄金比率なんかも研究されているのだろうか。サクサクのかき揚げも相まって、どんどん食べ進めていった。

お腹も心も満たされた私は、このうどんの美味しさの秘訣を探ろうと店の方に許可をいただき、厨房の中に入り取材を始めた。すると、スタッフの方が、こんなことを教えてくれた。

「いごくは、就労継続支援B型といって、知的障がいを持っている方に対して、就労の場を提供している施設です。デイサービスなどの福祉サービスの一種になりますね。知的障がい者の自立を目指し、働くことを学ぶ場所としてオープンしたんです。現在は9名の利用者さんがいらっしやいます。作業はその人の意思や特性を尊重して、ローテーションを組みながら厨房と接客をみんなで分担しています」

この時はじめて、この店が就労継続支援を行う「福祉事業所」なのだと理解した。こんな支援のあり方があるんだ！ 驚きだった。改めて厨房を振り返ると、色々な気づきがある。注文の際のダブルチェックは、利用者を支えるためのオペレーションであると気づかされたし、簡単な盛りつけや皿洗いは、利用者の方が率先してできるよう促されていた。この場所は、支援の場であり一般客が来るお店でもある。その両方を、どうすれば正確かつ効率よく行えるかを追い求めてきた結果、現在の働き方にシフトしてきたのだと感じられた。

コロナ禍で多くの飲食店が休業や短縮営業を余儀なくされる中、この場所は変わらずに営業を続けてきた。最大の理由は、天真庵が地域の「居場所」の役割も果たしていることだ。この店はそのもそも福祉事業所である。利用者は、この場所に通えなければ孤立してしまうおそれがあるため、天真庵は多くの福祉事業所と同じように営業を続けてきた。その意味で、この店は利用者の居場所であった。

一方で、この店はうどん屋でもある。福祉事業所として営業が続けられた結果、店としても営業が続き、常連さんがお昼ご飯を食べる場所としての「居場所」でもあり続けた。誰もが困難を背負い、居場所を失いかけたコロナ禍。この店は、障がいの有無に関係なく、誰かの居場所として、非常事態の地域における「救世主」として存在し続けた。

働く機会を提供する福祉サービスって？

こんな居場所が地域の中にあっただなんて、私が暮らしてきたまちにもきっとあったはずなのに、ほとんど気づくことがなかった…。私は気になって、天真庵と同じ「就労継続支援」について調べてみた。

就労継続支援は、障害者総合支援法に基づく福祉サービスのひとつで、一般企業で働くことが困難な知的障がいを持つ方に多く利用されている。

障がいや体調に合わせて働くことができ、仕事やその他の活動を通じて、知識や能力の向上も目指せるそうだ。この就労継続支援は、A型とB型の二つに分けられ、「雇用契約の有無」「資金の支払い」「対象年齢」などの項目によってA・Bのどちらかに分類される。

天真庵のようなB型は、雇用契約を結ばない「非雇用型」なので自分のペースで働くことができるという。また、条件を満たせば、障害者手帳を持つていない方でも利用でき、利用期間の上限も特設けられていない。そのため、長期的に就労トレーニングを受けることも可能だそうだ。

これに対してA型は、原則65歳未満の方が雇用契約を結んで、一般就労に向けたサービスを受けることができ、給料をもらいながら働けるのが特徴とのことだ。さらに調べてみると、いわき市には現在、「指定障害福祉サービス事業所就労継続支援B型」として登録されているのは34カ所、A型も含めると合計40カ所あることがわかった。いわき市の中学校は全部で39校なので、その数は意外と多いのかもしれない。

地元の中学校の名前はほとんど知っているのに、就労継続支援をはじめとする福祉事業所のことには名前はおろか、その存在すら知らなかった。「なんか大変そうだし、自分には関係ないから」という言葉で片付けてしまい、障がい者と健常者との間に無意識に壁を作っていた自分、障がい・福祉に対して無知であることを許していた自分を知った。無知であることが、知らぬ間に誰かの居場所を奪うことにつながっている。天真庵で「就労継続支援」を知った驚きと同様の、強い衝撃、そして後悔が私の中に渦巻いていた。

せっかく取材に来たのに、自分の無知ばかり嘆いていて申し訳がない。障がいのある人たちの存在は知っていたけれど、それ以上学ぼうとしなかった自分と向き合おう。そう気持ちを切り替えて、次の現場に向かった。



前野 有咲 まえのありさ
1999年生まれ、山形県鶴岡市出身。宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科卒業。大学時代から、インターンシップ・地域留学を通して地方に中長期的に滞在。「じぶんと、じぶんの住んでいる土地に愛と誇りをもって生きる人を増やす」をモットーに、情報発信やイベント企画を行う。趣味はファッション、コーヒー、カメラ。2022年4月福島県いわき市に移住し、現在はヘキレキ舎のアシスタントを務める。

制度の「間」を

埋めるのは

人として見る、

ということ

いごく編集部では、うどん店を皮切りに複数の施設を訪れ、まちなかで、障がい者に対する支援が行われていることを知った。もしかすると私たちが暮らす地域にも、我が家のそばにも、障がいのある人たちの日常があるのだろう。専門知識を持たない私たちができることは何か。そのヒントを得るべく、障害福祉行政に関わる、いわき市障がい福祉課の安部事務主任に話を聞いた。

安部 悠一郎さん
いわき市障がい福祉課 事務主任



編集部 ここ最近、「ダイバーシティ」や「SDGs」などの啓発が進んだことで、障がいについて学ぶ機会が増えてきているなど感じています。一方で、なんとなくわかったつもりになっても、家族に障がいのある人がいるというのではなかなか、福祉の制度や、障がいのある人たちの現状についてはほとんどわかりません。自分たちにもできることはないかと考え、今日はそのあたりのことから安部さんに教えてもらいたいと思ってきたのですが…。

安部 ありがとうございます。まず、大前提の話ですが、みなさんが今回訪問したような事業所が提供する「障害福祉サービス」というのは、障がい者の日常生活を全体的に支援するための法律「障害者総合支援法」に基づいています。以前は、障がい者の「自立」を目的として「障害者自立支援法」という名前だったのですが、2013年に法律が改正され、障がい者を「基本的人権を持つ個人」として尊重し、みんなが暮らしやすい地域社会の実現を目指して、サービスの充実化が図られてきました。

障害福祉サービスとして提供されるのは、ご本人の社会生活、日常生活を最低限支えるためのものです。例えば、住宅へのヘルパーによる支援や、日中にごす場や訓練を行う場、働く機会を提供する場といったものになります。ほかにもたくさんありますが、たとえば、スーパーとかに椅子のマークの駐車場がありますよね。「おもいやり駐車場」というものですが、もともとは2006年に佐賀県で初めて導入され全国に広がったサービスなんです。

また、所得や障がいの程度によりますが、障がいのあるお子さんがいる家庭であれば「特別児童扶養手当」が、大人の方には「特別障害者手当」というものが支給されます。色んな制度や法律で重層的に支援を組み立てているわけです。

このように、色々ある制度のひとつが「障害福祉サービス」になっていて、さらにその中に、働く場所を提供するためのサービスがあり、「就労移行支援」とか「就労継続支援」など個別のサービスに分かれています。就労移行支援は、障がい者が就労するために訓練を行うところ。就労継続支援は、すぐに就労するのは難しいかもしれないけれども、色んな作業とか工賃を得ることを通して、就労への筋道をつけるところという位置づけです。

就労継続支援も、A型とB型に分かれ、A型に関しては雇用契約も結びますが、B型の方は雇用契約を結んでいないので一般的な就労と異なる部分があります。基本的には、ご本人が自主的に

通い、作業をやった分の工賃をもらうというかたちです。皆さんが訪問した「天真庵」さんや「しおさい」さん、「あいあい」さんは、このB型にカテゴライズされます。

編集部 なるほど、むちゃくちゃ細かい！でも、それだけ制度はだいたい厚くなっていくということでもあるんですね。ただ、そこに入れない、つらさや困難はあるのに障がいでと認められない場合もあると思うんです。そういう方には、どういった支援があるんですか？

安部 どのような悩みを持っているかによって分かれてしまいますが、お仕事に関する悩みであれば、全国的な組織の中で「就業生活支援センター」というものがあります。障がいかどうかかわからないような、いわゆる「グレーゾーン」の方のお仕事の相談・生活の相談にもってもらえますし、保健所などでも、精神面での生きづらさや困難のある方の生活支援や悩み相談を受け付ける総合相談窓口を設けています。

たしかに制度は充実してきたように感じますが、個別の状況が異なりますので、支援が足りているところと、足りないところの差も出てきているように思います。最近だと、医療的なケアを必要とする障がい者の方、人工呼吸器をつけていたり、たん吸引を行うような方が自宅で生活するための支援制度などは全国的に不足しています。そういった制度の間の部分をどうするか。あとは、逆に色んな制度があるがゆえに、全体像を見渡せないといったところが支援制度の問題点だと感じます。

編集部 制度の間、施設と家の間、いろいろなところに「間」がありますね。制度がまだ使えないのであれば、そこが「社会」の役割というか「互助」みたいなものが求められたりするわけですよね…。そこで大事なことって、どんなことだと感じていますか？

安部 まずは、障がいのある人を「障がい者」と括らずに、ひとりの「人」として見てほしいですね。理解が進んだだけ、「障がい者だから出来ないよね。だから代わりに決めてあげるね」というように、本人の意志を無視し、良かれと思って色々やってしまうというケースが見受けられます。障がい分野では「私たちのことを、私たち抜きに決めないで」というスローガンがあります。相手を尊重するという基本的なことさえ意識してもらえたら、素敵な関係がくれるんじゃないかなと思っています。



SHIOSAI

こだわりの生麺を製造している部屋に案内していただき、利用者の作業風景を見学した。生麺製造部門のブースとよばれる2人の男性は、阿吽の呼吸といわんばかりのコンビネーションで、しつかりこねた生地をローラーにのりて押しつぶし、形を整えていく。単純作業に見える工程だが、掛け声やリズムを工夫しながら一つ一つ丁寧な作業が続く。編集部の写真撮影にも笑顔で応じてくれるあたりに余裕すら感じる。そうかと思えば、作業を終えてからの清掃、隅の埃や汚れをくまなく探すという仕事への意識の高さ、そして徹底ぶりには「プロ意識」の高さも感じられた。

2人の作業の様子を見守っていた施設の方によると、コロナになってから、うどんの注文数が激減してしまったそうだ。イベントへの出店などが減ったからだという。それでも、施設を止めるわけにはいかないうから、作業をさらに細分化して作り出し、利用者の勤務日数や時間を減らさないように工夫していたそうだ。これも「居場所」を守るための工夫だと言える。「利用者のみならずにとつての大事な居場所を守ることにつながっていますから」と力強く話されていた言葉に、確かな想いがあらわれているのを感じた。

「小名浜に来たついでだから」という小松さんに連れられて、今度はB型就労継続事業所である「ワークショップあいあい」を訪ねた。ここでは「工業用ウエス」が作られている。「ウエス」というのは、「機械の油汚れや不純物を拭き取つてきれいにするために使う一枚布」のこと。この「あいあい」では、国内各地から取り寄せた古着などをカットして工業用ウエスに再生し、地域の鉄工所や自動車修理工場、精密加工会社などへ納品しているのだそうだ。

一枚のウエスが出来るまでの作業はとても緻密だ。まずは素材ごとに分別。長年働いている利用者さんは、触った感触だけでどんな素材かを言い当てる事が出来るそうだ。体が布の手触りを完全にインプットしている。すごい。次に、服についているボタンを取り、模様が描かれている部分を裁断。そして集まった布を計量・結束して、袋詰め。この一連の作業をほぼ手作業で行う。

「綿100%の素材が一番高く売れます。無地の白もいいですね」。あ、無印良品のものは最高です！」

ウエスのマル秘情報を優しく教えてくれたのが代表の豊田節子さん。みなさんも、家に眠っている白地の服をぜひ探してほしい。

「普段なかなか利用者さんは納品に行く機会がないのですが、以前、取引先の方とたまたま会う機会があって、『このウエスを使うと仕上がりがぜんぜん違います！』という言葉をいただいたのが嬉しかったですね。みなさんにも知ってもらうことで、励みにつながると思っています。」

あいあいのみなさんが手を掛けてつくられたウエスは、機械を扱う業者の方達にとつてなくてはならない必需品なのだ。



「今回の自分の体験を記し、伝えること」。これが、いわきに詳しいわけでもうまい文章が書けるわけでもない私が、皆さんの居場所を作っていくためにできることなのだと思う。障がい・福祉へ関わる最初の一步に、特別な知識や技術は要らない。なぜなら、誰しもの身近なところに、その関わりしろが開かれているから。天真庵の美味しいうどんを食べ、あいあいで作られたウエスを使い、それを発信する。障がい・福祉と自分の生活が重なるところを見つけ、自分にできることをこれからも続けていきたい。

障がい者だろうが健常者だろうが、誰だつて自分の居場所がある日突然なくなつてしまつたら、心の拠り所を失つてしまう。取材の中で、コロナによる影響を受けているという事業所の方達の話聞いた私は、利用者のみさんの居場所を一緒に作っていくために、障がい・福祉の専門家ではない「自分」にできることはなんだろうかと考えていた。

今回の取材を通し、新たな制度・サービスのあり方を知れたこと、自分の興味関心のあるテーマ「居場所」との共通点を見いだせたこと、そして何より、直接現場で会った利用者のみさんの気さくな対応が、「大変そう、難しそう」という障がい・福祉の固定概念をもう一度ひっくり返してくれた。あの時のいごくのよう。

自分の興味、自分ができることから



変わりゆく状況の中で守るべきもの

天真庵の次に訪れたのは、小名浜にある「ワークセンターしおさい」。天真庵で食べた美味しい手打ちうどんは、ここで作られているそうだ。ちなみに、「しおさい」もまた、就労継続支援B型のサービスを提供する事業所だ。



AAI



安部 悠一郎さん
いわき市障がい福祉課 事務主任
事業係で障害福祉サービス事業所の指定事務等を担当。業務を通して対人関係の在り方を改めて勉強中。

池場 孝太
いごく編集長
市の地域包括ケアを進め、地域の高齢者、障がい者、子ども等を含めた地域共生社会を考える人。

浄土 洋輔さん
いわき基幹相談支援センター 社会福祉士
相談支援体制の強化を担い、障がいのある人や福祉事業者も支援する。“支援する人”を支援する人。

佐々木 千歩さん
就労移行支援事業所「つばさ」 主任支援員
就職する為に必要な様々な活動・訓練を提供する事業所にて支援にあたりながら、就職後の定着支援も行っている。

三瓶 純子さん
就労継続支援B型事業所「心楽」 サービス管理責任者
障がいや病気をお持ちで一般企業で働くことに不安がある方へ、就労やその他活動の場を提供している。

小野 広美さん
5歳から療育手帳をもつ
自閉症。出会った人に絵をプレゼントするのが楽しみ。新聞は気に入った漢字を切り抜くために毎日読む。

障がい福祉の「垣根」を、越えていく

「健常者」とカテゴライズされている私たちは、普段、障がい福祉と関わる機会ほとんどなく、私たちが「障がい福祉」に対して抱くイメージは、現場で起きていることと大きくちがったものになっている、なんてことも起こり得ます。まだまだ謎のベールに包まれている障がい福祉の現場を知り、地域に開いていくために私たちに何ができるのか。そのヒントを得るべく、障がい福祉に関わる皆さんにお話を伺いました。

聞き手・いごく編集部／構成・前野有咲／撮影・鈴木宇由

その人、自身を見る

編集部 皆さん、今日は忙しいところお集まりいただきありがとうございます。今日は、いわきで障がい福祉に関わるみなさんが、普段現場で感じていることを、福祉の魅力、面白さというものも含めて伺いたいと思います。まずはじめに、皆さんが感じている課題を教えてください。

安部 一番の課題は、障がいのある方が、どのような人なのかということが知られていない、浸透していないことだと感じています。障がいのある方は、赤ちゃんから高齢者まで、年齢ひとつとっても範囲が広く、また、それぞれ個別の悩みや課題を抱えています。全体を体系的にまとめるというのが難しいんです。

池場 そうですね。たしかに、身内に障がいのある人がいるとか、私たちのように行政に関わるという場合でもなければ、障がいというものにほとんど触れない生活になっていきますよね。浸透していないのがゆえの偏見があるというのが大きな課題だと私も感じます。

安部 色んな特性、個性をもった人がいるのに、どうしても「障がい者」っていうレッテルが貼られてしまう。障がいではなくて、その人自身を見てほしいと思います。

三瓶 お散歩などで出かける際に、行き先のお店や施設が受け入れてくれるところかどうか、常々気にしてしまいます。ぱつと見れば障がいを持っていてと分からなくても、環境によってパニックを起こす方がいるので、怖いという印象を持たれる一般の方もいらっしゃるでしょう。

浄土 いまは、どうしても「支援」が先に来すぎていると感じるんです。支援ありきだと、「障がいがある人は支援や助けが必要な人」と認識されてしまい、自分にはその支援ができるかどうかわからない、だから関わらないと思われてしまう。そうじゃなく、やはりその人を知ろうとすること。そこから始めると、関わりだ

の人勝手に食っちゃったの!?」ってなってしまうのかも。でもなあ、食べたいときに食べたいって思うことは、障がいの有無に関係ないですよ。特別視するんじゃなくて同じ感覚で笑えればいいんですけど、なかなかそこまでいかな...

多様な人が交わる場所

編集部 「なんで食べたんだよ!」と叱るのではなくって、「ブルーベリー、木になっちゃったの見たら、そりゃあ食べたいよね」って気持ちで、支援の場ではなくて、一緒に感じられる、一緒に体験できる場所があればいいのかもしれない。でも、現状、ない。どうしたら同じ目線で関係をつくれるでしょうか?..

安部 たえば、障がいのある方がデザインしたものを販売するというのは近年ますます増えていますし、アートの活動も増えていますよね。障がいのある方って、他の人と見え方がちよつと違って、本人に見えているものを表現してもらうことで、その人の世界の捉え方を、私たちも体験できるという面白さがあると思います。

池場 あとは、コロナ禍で外に行きにくくなって閉塞感を感じている時に、まちなかとかに、喫茶店のような、生活者と支援者、一般の方たちが混じり合うような居場所があるだけでもいいですね。

浄土 たしかに。特別な支援をしてもらわなくてもいいんです。いろんな人が、いてもいい、来てほしい、そういう場所があるだけで変わりますよね。本人たちが自分に合う場所を選べるようになるので、過ごし方の選択肢も増えます。

安部 ほかに、たとえば暮らしのちよつとした困りごとを支え合う「住民支え合い活動」がいわきでは推進されていますが、その場合、困りごとを抱えている人との接点をつくるために自宅に直接伺ったり、よりアグレッシブに接点

って結構つくれると思うんです。

編集部 たしかに、制度が充実して、障がいに対する理解が深まってきたからこそ、逆に早く行政やサービスにつながるべきだという考えが生まれているのかもしれない。実際、支援に関わっている佐々木さんと三瓶さんは、この問題を、どんなふうに感じていますか?

三瓶 そうですね。支援の現場といっても、心がけていることは特別じゃありません。たとえば、利用者さんの出来ないところ、苦手なところを見るんじやなくて、なにが難しく、なにができれば成功するかを試行錯誤しています。むしろ、利用者さんから物事の捉え方を学んでいると感じるくらいです。

佐々木 つばさでは、支援の会議で、利用者さんのいいところを挙げて、書類にたくさん書き込んだりしています。会議の度にそれを見返すんですが、この長所を伸ばしていかないよねとか私たちがつぶつぶして押さえつけているかも? ということも見えてきます。そのおかげでスタッフ同士でもお互いのことを褒め合おうという意識が生まれています。

編集部 うわああ、それ、子育てにも共通していますね。でもできてない。皆さんの支援の現場では「ポジティブにその人を評価している」という捉え方やノウハウが共有されているんですね。それが支援の外側、社会の側にも広がっていくといいなと思うんですけど、なかなか伝わらない。なぜなのでしょう?

浄土 そもそも、障がい、福祉の業界があまり外に開いていないっていうのもありますね。業界の中だと「あるある!」って笑える話があるんですけど、問題は行動だと捉えられてしまうことでもありますし、難しいところ。たとえば、三瓶さんが勤める心楽さんでは、事業所で栽培している販売用のブルーベリーを利用者がさんが勝手に食べちゃった話とか面白いんです。

池場 え!? すごく面白いですね! でも、違う価値観を持つ外部の人からすると「え? あをつくりにいけます。それをやるのが「地域を知る」「隣人を知る」ことにもつながるんです。参考になることは多いです。

編集部 なるほど。じゃあ逆に、みなさんの施設に、私たちのような人間が気軽に遊びに行ってもいいの。そんなことって可能なんじゃないか。

三瓶 ぜひ遊びに来てください! お客さんが来ているすぐ脇で草むしりしたり、夏はそれこそ、草むしりに行ってブルーベリーも食べちゃうっていう利用者さんもいますが、すごく楽しいと思います。

編集部 いいじゃないですか! 草むしりボランティアをやればブルーベリーも食べられて、障がいのある人もない人も、ごちゃごちゃにいますみたいな。そういう企画を続けることで、地域づくりの担い手と、福祉の担い手が歩み寄っていくことにもつながりそうです。

佐々木 あとは、利用者さんの得意分野と地域が抱えるニーズをうまくマッチングさせる「コイデネットワーク」ができる人がうちよつといたらすごくいいですね。

安部 福祉が面白いのは、こちらが助けているつもりが、じつはこちらが助けられている、なんていう逆転が起きることです。障がいのある人、ではなく、地域が抱える困りごとを解決する資源なんだと捉え直してみると、福祉との関わりが変わるかもしれません。

編集部 おお、障害福祉サービス事業所は、私たちに新しい見方をもたらしてくれる地域の文化的資源だと考えた方がいいのか。とすると、その資源を活用しないのはもったいない。地域で動いている人たちが、この文化資源を生かすことができるか、だれにとっても暮らしやすい地域につながるかもしれません。大変勉強になりました。皆さん、そして広美さん、今日はありがとうございました!

座談会には小野広美さんも参加しました。彼女自身がこの会を楽しみにし、自分の意志で参加したんです。広美さんの存在を、メンバー全員が感じていました。直接は対話していませんが、参加していたんです。だから、広美さんの写真もいっしょに掲載することにしました。(浄土)



ITSUDARE KITCHEN



いつだれ キッチン

いわき市平上荒川字桜町1-1
TEL 0246-22-5491(布紗)

お弁当

野菜中心のヘルシー&やさしいお弁当に、これまたやさしい手づくりアート付きの帯。全部一点もの。すでに帯のファンが多数。非代替性アート。(い)



KIRA KIRA



就労支援

きらきら

いわき市仁井田町寺前9番地の1
TEL 0246-84-7102

しあわせみそ

なんともハッピーなネーミング。だって「しあわせみそ」ですよ？蓋を開けるたびに絶妙に「しあわせ」を感じます。味は質実剛健。大豆の旨味がふくよかで塩気もちょうどいい。毎日の味噌汁もしあわせに。(り)

HURUKUTEN



フルクテン

いわき市平字薮川町5番地の8
TEL 0246-21-2741

ノルウェーパン

本場の製法にこだわった、無添加で食物繊維豊富なこのノルウェーパン。んまいっ！しかも低カロリーで身体にも美味しい。そのこだわり故に生産数は少ない。確実に食べたい方は、まずお電話を！1/2サイズ 230円(渡)



SHIOSAI

ワークセンター

しおさい

いわき市小名浜諏訪町1番地の10
ローズガーデン1階
TEL 0246-73-2077

うどん・ラーメン

こっ、これは！うまっ！このコシ。そして麺自体の小麦のうまさ。味よし食感よし。わたし、しおさいの麺のファンです。一枚一枚手描きされた一点ものの帯がまた楽しいです。(い)



AIAI

ワークショップ あいあい

いわき市小名浜字下町8番地
TEL 0246-52-2522

ウエス

今号の表紙を飾ったあいあいのウエス。取材を機に弊社(印刷所)でも導入した。絶妙に使い古された綿100%の生地がしつこい油污れもしっかりキャッチ。なぜか色も柄も可愛い。もう他社のウエスには戻れない。(渡)



HIMAWARI

ひまわり

共同作業所

いわき市内郷御蔵町三丁目142番地
TEL 0246-27-4960

ざるとうふ

この数年ずっと「濃厚で高級っぽい豆腐をたまに食べる」スタイルだったけど、この豆腐を食べたから「ああ、オレが探してたのはこういう定番だったんだ」と思った、週4くらい食べられるザ・定番豆腐。(り)



TERASU

地域活動支援センター

てらす

いわき市平字旧城跡12番地の80
TEL 0246-22-5491

テキスタイルグッズ

てらすのバッグ・ポーチなどの素材には、地域の皆さんから寄付された着物や衣服が使われています。糸ほどこき職人、織り機職人、裁縫職人など匠たちの技が結集し、一つの作品が完成します。最近では、米袋ブームが到来しているんだとか！？(前)



イラストレーション:おのひろみ

は、く、し、と、こ、し、ご、と

The Choice

いわき市内でこさえられている、たくさんの「てしごと」をまとめた冊子「ハンドメイドいわき」から、編集部のおすすめ商品を一挙紹介！！



「障がい者のために」から「障がい者と一緒に」

～ニュージーランドの障害者支援制度の今～

今、NZの障がい者に対する支援サービスが大きく変わろうとしている。2020年10月、NZ政府は障がい者のための新しい省の創立をはじめとする全般的な障害者制度改革案を発表した。Enabling Good Lives（良い生活を可能に）という制度の全国的導入とAccessibility for New Zealanders Bill（NZアクセシビリティ法案）の設立も含まれるという。

なぜこれほど大規模な改革が必要なのだろうか？少しでも調べてみれば現在の制度の問題がはっきり見えてくる。同じ発表の中で、障害課題対策担当大臣が「現在の制度は破綻している」と語っているように、今の支援サービスは、複数の機関や制度によって管理されているうえに、障がいの原因などの条件によってアクセスできる支援が大きく変わってしまうのだ。

2013年の国勢調査によると、ニュージーランド人の約25%が障がいを持っているということが分かった。にもかかわらず制度が断片的で分かりづらいため、必要な支援にアクセスできていない人がたくさん

いると思われる。さらに全ての支援が医療機関の管理下に入っているが、障がい当事者は「これこそ障がいのあり方の根本的な誤解を示している」という。そもそも障がいとは個人の健康問題ではなく、社会への参加を妨げるバリアによって発生するものであるというのだ。

たとえば、2020年に行われたNZにおける孤独についての調査によると、孤独を「ほぼいつも又はいつも感じる」と答えた障がいのある人は、そうでない人の4倍いることが明らかになった。同調査でインタビューされた障害者支援団体の一員は、この原因について「差別や物理的なアクセスの問題のせいで働けない場合が多く、その結果収入が低くなり周りの人々と交流する機会も少なくなって孤独に繋がっている」という。障がいをもつばら医療の観点から捉える現在の制度では、このような課題は解決しないのではないかと

これから導入される新制度は、この課題に直接取り組む。最大の変化は、省の設立により支援サービ



シルヴィア・ギラハー
1994年ニュージーランド出身。2017年にオークランド大学を卒業後、ALTとしていわき市へ移住。現在、フリーランスで翻訳の仕事をしている。

スがシンプルになり、医療制度から独立したことだ。Enabling Good Livesという制度では、障がい当事者や家族などが支援予算を管理できるようになった。介護員を雇うのでも、iPadを買うのでもいい。個人のニーズに合った包括的な支援が得られ、自立して周りのコミュニティに参加できるようにしようということだ。またアクセシビリティ法案により、職場などでの障がいのある人の権利を守ることが明確になった。

実は、障害者団体は前々からこのような問題を指摘し、障がい者のための省の創立などを求めてきた。このため今回の発表を歓迎する声もあるようだが、一方で懸念も残る。最近、障がい当事者ではない人が省の設立を担当したことに対し、政府は「障がい者と一緒に」ではなく、これまでのように「障がい者のために」すべてを決めていくつもりなのではないかという不安の声が上がったのだ。NZ障害サポートネットワーク会長はこう語っている。「新しい省が目的を達成するためには、障がい者が自分たちで自分たちのために土台から築くことが必要だ」と。

包括かわら版

地域包括ケア推進課からのお知らせをお伝えいたします。

はんどめいどいわき

てしごとをまとめた冊子を読んで
福祉を、あなたの日常に

障がいのある方たちの通う事業所などで作られた名品や逸品、日用品はたまたサービスなどをまとめた「はんどめいどいわき」という冊子があるのを皆さんご存知ですか？ いわき市の「障がい福祉課」が毎年発行しているもので、今回「紙のいごく」の特集で紹介した天真庵のうどんや、ワーケーションあいいいのウエスなど、いわき市内にある50カ所以上の福祉事業所、施設それぞれの「はんどめいど」が紹介されています。

障がいは「特性」でもありません。人前でおしゃべりしたり、事務仕事に取り組んだりということに苦手意識があっても、ひとつの仕事にじっくりと向き合う粘り強さは、パンやうどん、豆腐といった商品の質を高め、与えられた作業に没頭する集中力は、清掃やチラシの折り込みなど環境整備

の仕事に活きてきます。健常者の目線で見れば「障がい」は「弱点」に見えるかもしれませんが、環境さえ整えばそれは強みに変化する、ということです。

けれど、そういうことを頭ごなしに「こうあるべきだ」と紹介しても、それまで福祉事業と関わりがなかった多くの人たちは、なかなかイメージが湧かないかもしれません。だからこそ、こうして「はんどめいど」を買ってみる、味わってみる、気に入ったら継続して使ってみる、仕事を頼んでみるというアクションが大事。ごくごく普通の経済活動の中に「福祉」を組み込むことで、誰もが自分らしく、社会の一員として暮らすことのできる社会づくりのきっかけになるのではないしょうか。各地区保健福祉センターなどで配布されています！ぜひ手に取ってご覧ください。



令和4年度版『はんどめいどいわき』
発行：いわき市保健福祉部障がい福祉課



はんどめいどいわきの冊子。令和2年度版は、なんとigoku編集部も制作に関わらせてもらいました

JAGDA にigoku が紹介されました。

文 高木市之助

日本グラフィックデザイン協会（以下JAGDA）が地域のデザインを動画で紹介する「Growing 地産デザイン」というシリーズに、いごくの事例が取り上げられました。編集部デザイナーのわたくし高木と創刊編集長の猪狩のインタビューを交えて、「福祉をデザインする」というテーマで取材していただきました。

JAGDAはグラフィックデザイナーの職能団体で、1987年に設立されました（初代会長は亀倉雄策氏。亀倉氏は1964年東京オリンピックのシンボルマークやポスターをはじめ、グッドデザインのGマークやNTTやTDKといった企業ロゴなど様々なデザインを手がけた日本グラフィックデザイナー界の巨匠です）。

グラフィックデザインという仕事をものすごく簡単に説明すると「見た目を作る仕事」です。私たちが生活している身の回りにはグラフィックデザインがあふれています。チラシやパンフレット、商品を覆うパッケージ、ポスター、案内板、WEBサイトやアプリの操作画面などなど。挙げていたらキリがないくらい身近に存在します。

先ほどグラフィックデザインは見た目を作る仕事と書きましたが、実はその手前には大事な大事な仕事があります。それは「見た人に何を届けるのか」という、情報を整理する仕事です。受け手がスムーズに情報を受け取れるように、届けたい情報を取捨選択して、適切に配置すること。見た人にどんな印象を感じてほしいのか。そのためにはどんな表現を作ればよいのか。とい

フクシ本のコーナー



文 小松理虔

ケアとアートの教室

東京藝術大学
Diversity on the Arts プロジェクト

一言で言えば「フクシ」と「アート」の親和性の高さについて書かれた本である。最初のほうにこんなことが書いてあった。フクシもアートも、どちらも多様性に重きを置くことで共通してるし、両方とも、ほら、人間とはなにかを問うてるじゃないと。その説明を読んで、おおお、そうだよそうだよ、と共感してしまった。本書の言葉で救われる人は少なくないだろう。

本には、さまざまな活動家や支援者が登場する。障害、老い、貧困、性差別：厳し

編集後記

2代目編集長 池場孝太

今号のテーマは社会的包摂を取り上げてみました。みなさん、どのように感じてくださいか。

社会的包摂、聞きなれない言葉です。社会的包摂とは社会的に全体を包み込むこと、だれも排除されず、全員が社会に参画する機会を持つことを意味します。この機会に少しでも関心を持っていただけたら幸いです。

また、今号で私が編集長としての最後の号となります。新型コロナウイルスの影響を受け、思うように動けなかったのが心残りですが、地域包括ケアシステム、地域共生社会は、まだまだこれからの分野ですので、編集部のみなさんには頑張っていたいただきたいと思います。

それでは、みなさんまたどこかでお会いしましょう。

紙のいごく vol.11 に掲載しました記事の一部につきまして、誤解を招く表現がございました。右記のとおり訂正いたしました。



紙のいごく 12号

2022年3月31日発行

igoku編集部

編集長 = 池場孝太
プロデューサー = 渡邊陽一
ライター = 小松理虔 江尻浩二郎 前野有咲
デザイナー = 高木市之助
ビデオグラファー = 田村博之

発行 = いわき市地域包括ケア推進課
印刷 = 株式会社 植田印刷所

いわきのいごきを伝えるウェブマガジン「いごく」

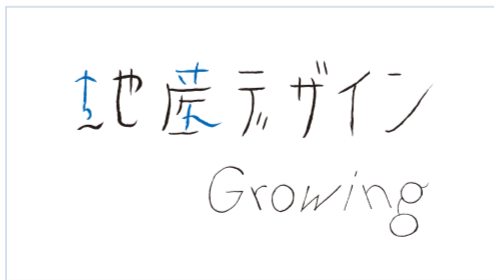
<https://igoku.jp>



東京藝術大学 Diversity on the Arts
プロジェクト/左右社

小松理虔

ローカル・アクティビスト。文筆家。igoku編集部。単著「新復興論」、「地方を生きる」など。小名浜在住。チナン食堂では「焼きそば」をよく食べる。



YouTube「Growing 地産デザイン」
地域のデザインを「見える化」
Growing 地産デザイン：①
デザイン×福祉×福島

「老病死」というナイーブなテーマを、いごくではどのように「見える化」して伝えようとしたのか。デザインの視点から丁寧に取材していただきました。YouTubeで視聴できますので、ぜひご覧ください。

また、日本各地のローカルな事例も今後不定期でアップされるということです。興味がある方はチャンネル登録もよろしく願っています。

HIROMI ONO



本号の6~7ページに登場していただいた小野広美さんの作品をご紹介します。広美さんの作品は、タイポグラフィ(文字を使った表現)と反復効果を付けたイラストレーションの組み合わせが特徴です。独特の優しいタッチをお楽しみください。